

小山先生と大学人の精神

佐藤 瑠 威

実をいえば、私は小山先生と親しくおつきあいをしていたわけではない。それどころか、先生からお話を聞いたりするような機会もほとんどもたなかった。事実、あることの御礼のために先生のお宅にうかがって、30分ほどお話をしたことのをぞけば、あとは、たまたま大学の食堂で同じテーブルにすわったときに、5分か10分ほどの間、お話を聞く機会が数回あっただけである。

ただし、直接接触する機会が乏しかったにもかかわらず、私は小山先生を知る事ができた当初から、深い印象を受け、すぐに先生に対して敬愛の念を抱くようになった。その敬愛の念はその後もますます強まり、ついに先生と2度と再びお会いすることができなくなった現在においても、深く心の中に広がりつづけている。

私がこのような深い敬愛の念を小山先生に対して抱くようになったのは、先生に接した経験をもつ人なら誰しも感じとるにちがいないような、先生のたたくまいからにじみでる知性と品位にとむ高貴にして豊かな人間性にひかれてのことでもあったが、それと同時に、先生がなによりも“大学人の精神”とでもいうものを他に比類のない形でそなえておられたことに深い感銘を受けたからであった。

私事にわたって恐縮であるが、私の学生時代に日本中の大学を混乱にまきこんだあのいわゆる「大学紛争」が起こった。焦点となった問題は決して一様ではなかったが、それぞれの大学における多様な問題がしばしば、「学問とは何か」

「何のための学問か」というもっとも原理的な問題にたちかえて議論され、追求されていった。そのような風潮は、やがて大学および大学人のありかたをめぐっておびただしい議論を沸騰させていった。そして、変革の時代の常として、若者の間における一時の精神の高揚は、現存するものへの徹底した仮借なき批判を生みだし（「存在するものはすべて許されない」(1?) 高橋和巳『わが解体』に附された学生の詩）、しばしばもっともすぐれた学者たちもが学生の批判的にされていった。ちょうど大学を卒業して、学者になるための修業時代ともいうべき大学院生の時期にこのような時代の思潮にさらされた私は、さすがに多少なりとも学問や大学や大学人のありかたについて反省を迫られざるをえなかった。しかし、

問題を真剣に考えれば考えるほど、〈自己否定〉という当時の流行語に象徴されるような、学問や学者のありかたについての純粹できびしく批判的な論潮は、私に大学人となる勇気を喪失させるに十分なものがあつた。しかし他に希望する職もなく、また「人間は無益な受難である」というサルトルの大著『存在と無』の存在論の結語に共感を覚え、人生についてかなり深いニヒリズムを抱いていた当時の私は、他の道を選ぶ意欲もなく、いわば袋小路に迷いこんだ心境の中で大学人としての人生に入りこんでいった。希望と意欲をもってではなく、恐れと不安を抱きつつ、はたしてどのような道を進めば、当時の学問論や大学論で提起された大学人のありかたについてのまことに厳しい尺度を満たすことができるのかと自問しつつ、大学人としてのスタートをきらねばならなかつた。このような心境にあつた当時の私に小山先生の存在は深い印象をあたえずにはおかなかつた。私はほとんど直観的に、このような人こそ大学人の範とされるべき人にちがいないと思ひ、爾來、絶えず先生の言葉とふるまいとを見守りつつ、秘かに自らの大学人としてのありかたの鑑としてきた。

先生のもの静かで控え目な態度の底には、明らかに大学人としてのもっとも重要な精神的特質が実に堅牢な形で横たわつていた。すなわち、人間における知性のもつ重要性についての深い内面的な確信と、そして知性を中心として人間性を形成してゆくこと、いいかえれば、学問を通して人間を教育してゆくことの意味についての深い確信と、そしてこのような内面的確信をもつた人間のみが真にそなえうところの知的誠実さと人間的品位、このような大学人の精神の核をなすものを先生はまことに深く自らのものとされてきた。このような精神を、先生はおそらく人生において他の多くのものを犠牲にし、断念しながら、生涯を通して絶えまなく築きあげていかれたにちがいない。このような精神は、あらゆる建造物や図書や専門的知識に先立って、大学が大学であるために不可欠のものでありながら、身につけることの実に困難なものであり、それゆゑ、実際にはまことにまれにしか存在することのないものである。それを思うと、地方の小さな大学で大学人としての生活を始めたときに、小山先生のようなかたを身近に見ることができたことは、まことに幸運なことであつたと思わざるをえない。先生のことに想いをめぐらすとき、深い感謝の念にかられるとともに、先生のあのかげがえのない大学人としての精神が、先生がその人生をすごされた場所にいくらかでも継承されてゆくことを願わずにはいられない。